宮古方言で「てぃんぬに」（天の根）は地平線を意味します。私の心の「てぃんぬに」には未来へ向って挑む「おもい」が描かれています。

沖縄県立宮古病院 院長
**本永　英治　先生**

**質問 1. 県立宮古病院 院長ご就任おめでとうございます。ご就任に当たってのご感想と今後の抱負をお聞かせ下さい。**

60 歳（還暦）という年齢を迎え、自分の故郷・宮古島で責任ある立場で病院長の任務に就くことは、医療人としてのラストステージに入った気持ちでいます。『最後良ければ全てよし』という格言にあるように、自分自身のこれまで学んできた知識や技術を駆使して職場の皆さんと連繋し、宮古島住民一人ひとりの健康増進の自立のサポートに向けて貢献していきたいと考えております。

**質問 2. 本永先生が目指す病院運営方針、医療機関等との連携についてお聞かせ頂けないでしょうか。**

第一に高品質の医療の達成（へ向けて日々活動する）へ向けての行動です。それには当院職員が、知・技・学を重視し、各々の分野における道具と技術の達人・専門職（人）として自己達成・自己完成に向かって自ら主体的・自主的に鍛錬・修行していくこと、そして和・敬・省を重視し、各々の分野における人間同志のコミュニケーションの技術・技量を高めていくよう修行していくことを望んでいます。

第二に地域住民と共に歩む姿勢です。医療人として当院職員は、患者や患者家族に対して常に敬意を持って接し、インフォームド・コンセントを基本とした、症状、検査結果、治療計画などを十二分に説明をしながら、医師を始めとする病院職員と患者らとの相互の理解・同意、そして合意形成のもとに患者のマネージメントを進めていくことを望んでいます。

そういう医療人としての態度を基本として、私は 5 つの宮古病院運営方針を掲げています。

1. 政策医療の強化・維持、そして高地域完結型医療の達成に向かう
2. 地域の医療機関と診療連携強化していく
3. 健全経営の強化と経常収支の黒字を目標とする
4. 教育と人材育成
5. 安全な医療と高品質医療実施の体制

5 つの運営目標のうち、2 番目に掲げた『地域医療機関との診療連携の強化』は大きな課題であると考えておりますし、宮古島の医療の歴史的変遷の中で時代の要請として、地域住民の診療連携文化の熟成度を考慮しながら判断していってみたいと考えております。その中で、住民と医療機関同志の信頼関係に基づいた紹介、

逆紹介などの診療連携を築くことができればと考えております。さらに平成25年に電子カルテを導入し電子情報文化も進んできたところでITを利用した地域連携が構築できればと考えています。

**質問3. 医師不足、救急医療、医療資源の確保を含めた離島医療の現状と今後の課題についてお聞かせください。**

離島医療は医師や看護師はいうまでもなく医療専門職など人材不足のハンディを負いながら現在に至っています。その中で時代と共に要請される医療人のあり方も変化しています。医師の少ない時代には何でも診断し初期治療のできる一般医が特に離島では重要視されていました。しかしながら医療の進歩と共に、医療は一つひとつの専門分野の知識や技術が高度になり発展・進化してきました。それに応じて住民の求める医療も専門医療に向かっていく兆しがありましたが、最近になって住民のニーズも変化してきています。それは疾病構造の変化、例えば高齢者の増加に伴う高齢者医療の姿、世界的に広がる感染症疾患の増大、慢性疾患患者の増大、リスクの高い検査手技の増加やそれに伴う医療事故の増加、市民の権利に伴うインフォームド・コンセントに代表する医師－患者間の同意・合意形成が求められるなど、さらには地域における健康概念の視点など統合的視点から医療を考えなければ対応できない状況にもなってきています。

これまでの人材不足というハンディに加えて新しい統合的医療観に視点をおいて離島医療を考えながら、時代に要請に応じて対応していかねばと考えております。

政策医療と呼ばれる、安心･安全な救急医療、周産期医療、精神医療などの機能を維持していくだけでも相当の人材とエネルギーが必要になっています。宮古病院は1年365日24時間体制で全科救急患者に対応しています。このことは深夜を含めて勤務する職員には相当の身体的・精神的負荷をかけています。循環器医、脳外科医、外科医、内科医、小児科医、産婦人科医、精神科医などを始め多くの医師らや看護師を始めとするスタッフは少ない人数で、当直以外にも時間外で救急患者や急変患者に対応しています。このことを宮古島住民が理解して、そして我々と一緒にどのように宮古島の救急医療をサポートしていくかを考えていって欲しいと願っています。住民と共に歩む医療を唱っている当院の理念達成にもこのことの理解は第一歩になると考えています。

**質問4. 沖縄県立宮古病院初期研修プログラム（パイカ星）を立ち上げた意義と将来展望をお聞かせください。**

平成16年、何とか離島医療を担う医師の安定確保のためにも、臨床研修教育システムを構築せねばと模索が始まりました。そして新しい宮古病院建築へ向けてのワーキング委員会が立ち上がりました。多職種によるワークショップが開催され、初期研修プログラムの骨組みが完成しました。当初は救急3ヶ月コースと地域保健1ヶ月コースのプログラムを作成し、初期研修医受け入れ体制が整いました。研修医教育の実績を積み重ねることで近い将来に基幹型研修病院へ昇格していくことに宮古病院の夢を託しました。そうして平成16年11月に沖縄県立宮古病院の臨床研修教育としての歴史が始まりました。その時期に日本全国で新医師卒後臨床研修制度が始まりました。プライマリ・ケアに必要な初期の診断と治療ができる医師の養成に力点が置かれたのが特徴ともいえます。新医師卒後臨床研修制度のスタートでは当院は琉球大学医学部病院を基幹病院とするRyuMic琉球大学病院関連施設研修群、いわゆるRyuMic協力型研修病院の形で始まりました。

そうして12年後の平成28年4月から基幹型研修病院としては最初の研修医を受け入れるこ

とが出来ました。その初期研修プログラムの名前が「パイカ星」です。これまでの平成16年度からの年月を考えると画期的なことで大きな喜びとなりました。小さな宮古島から世界に向けて高い倫理性を持つヒューマニズムに溢れた地域医療に貢献する若い医師を羽ばたかせていければと、今後も日々学習者として取り組んでいくのをミッションとしていきたいものです。

**質問5. 県医師会に対するご要望がございましたらお聞かせください。**

沖縄県は島嶼県で大小の有人離島を抱えています。沖縄県の医療政策は、離島住民の健康を守るという使命があります。沖縄県立宮古病院も時代の要請を受け新しい医療観や日進月歩進歩していく医療技術を取り入れ、宮古群島の地域住民と共に健康増進を進めていきますので色々な思案で困る場合にはぜひとも力を貸して欲しいと願っています。

基幹型研修病院として当院は沖縄県内の基幹型病院と仲間入りができました。これを機にさらなる交流を図っていきたい所存であり、ぜひとも人材交流も含めて沖縄県医師会の所有する多くの知的財産を共有していきたいと願っています。

**質問6. 最後に日頃の健康法、ご趣味、座右の銘等がございましたらお聞かせください。**

私のニックネームは「あにむぬかに」です。「あにむぬ」とは宮古方言で「なるがまま、あるがままにまかせる、しょうがないなぁ」との意味です。私の健康に対する考えもそれに似ています。「疲れたら休む、疲れがとれて元気が出れば活動する」が、私の健康法です。具体的には、毎日の筋肉ストレッチング、柔軟体操、有酸素運動で、特に固くなりがちの四肢関節ストレッチや体幹ストレッチを時間かけて行っています。

趣味は「自然観察」「宮古方言研究」「宮古島民謡・古謡を楽しむ」です。いずれも平成13年頃から始めています。「自然観察」では、野鳥を始めとする動植物、地質・地形、海のいきものなどが好きです。保良川海岸と七又海岸の崖下が私の今一番好きな場所です。また最近は興味が星空観察となり、「南十字星」や「長寿星」「すばる星」などの写真撮影も天気の良い日を見計らって行っています。「宮古方言」は宮古方言の音韻や音声を文字で書けるようになりました。自然エッセイなどを全宮古方言で書けるようになりたいと夢見て勉強してきましたが、現在ほぼそれも完成していますので、今後はさらに深く学問していきたいです。宮古島の古謡も宮古島の古老たちから聞きだし、アカペラで唄えるほどになりました。最近は蛇味線で「伊良部とうがに」「与那嶺姉がま」「池間ぬ主」「アダン屋ぬ按司」などを唄うことができました。時々唄っています。自分の生まれ故郷の歌を奏でると何故か心が落ち着きます。不思議だなぁと思います。

「座右の銘」は、私の最も尊敬する三石巌氏から頂いた楯にある言葉です。「漫然と年をとるべからず、学習者として年をとるべし」・・この楯は私の一番の宝です。

この度はお忙しい中、ご回答頂きまして、誠に有難うございました。

インタビューアー：広報委員　本竹 秀光